

6 下呂市下呂地域の民話

下呂地域では下呂温泉の由来となっている「しらさぎ伝説」がある。これは、傷を負った白鷺が体を休めた河原から温泉が湧き出ていたというものである。

また、竹原川と合流する大淵地域に「椀貸せ淵」の話が伝えられており、この話をモチーフにして夏の「龍神火祭り」が行われている。この話の構成は、高根町の や久々野町の釜淵の話と同じである。

(6-1) しらさぎ伝説

①話の内容

下呂温泉の発見は、湯ヶ峰の山中に湧中したと伝えられている。湯には疲れや病気を癒す効果があり、遠方からも多くの人々が来た。しかし、この温泉は一夜のうちにその湯が益田川原へ移ってしまったと伝えられる。三百年にわたって湧き出ていた温泉がやんでしまっていたが、あるとき、傷ついた白鷺が今の湯ヶ峰の淵に舞い降りてそこへ行ってみると、温泉が湧き出ていた。そして、温泉が発見された樹の下に薬師如来像があり、そこにお堂を建てて安置した。

それが今の温泉寺である。傷ついた白鷺は薬師如来の化身だと言われている。

(参考資料『飛騨下呂』ほか)



下呂市少ヶ野地域から見た湯ヶ峰
(8月11日下呂市)



温泉寺(7月31日下呂市湯之島)

②取材調査

かつて下呂温泉は湯が峰から湧出していたが、その後、現在の湯之島地区に湧出したという。望川館専務の熊崎平一郎さん(37歳)から話を聞いた。

「かつては桶に温泉を汲み、各温泉施設に運んだそう、川原は少し掘るととても温かったという話を聞いたことがある。しかし、やがて需要過剰気味になり、加水や加熱しなくても安定した温泉を供給できるように昭和49年に集中管理システムができた。」



温泉寺(上)と集中管理場(下)
(7月31日下呂市湯之島)

下呂地域に数カ所ある集中管理場の一つが温泉寺のすぐ下にある。お湯が絶えないように薬師如来が見守ってくれているようにもみえる。

③研究・考察

温泉寺境内に古い絵馬が飾られていた。資料によると、「天保7（1836）年に奉納されたもので、伊勢国桑名から湯治に来た客（直七）が体調がよくなり、帰りには籠を空にして歩いて帰って行く」様子を描いたものだという。



天保年間奉納温泉寺絵馬
（『飛騨下呂図録』より）



昭和14年の露天風呂
（『飛騨下呂図録』より）

「しらさぎ伝説」は下呂温泉特有の内容だと思っていたが、調査を進めると、愛媛県道後温泉、熊本県玉名温泉など日本各地にこのような話があることを知った。さらに地歴科の中村浩一先生から下呂温泉と姉妹温泉である韓国儒城（ユソン）温泉にもしらさぎ伝説と似た鶴の話があり、話の内容は同じであることを聞いた。



ユソン温泉の鶴の像
（2011年11月7日）



ユソン温泉の足湯の風景
（2011年11月7日）

(6-2) 椀貸せ淵

①話の内容

下呂駅より約4キロ下ったところに帯雲橋（たいうんきょう）という橋がある。帯雲橋の下に今では、泥水がたまっているところがある。ここが昔、椀などを貸したという椀貸せ淵である。深さはわからないが、この下の横の方に、穴があいており、この穴は遠く竜宮に通じているといわれている。昔は、竜宮の乙姫様の機を織る音が、かすかに聞こえていたそうである。そのころ里の人々は、お正月・お盆・お祭りなどに、お膳やお椀を借りにきていた。前日になると必要な数を頼んでおいて翌朝行くと、その数だけ入り口にちゃんと並べてあったという。里の人は喜んで、本当に不自由なしに暮らしていた。だがある年、一人の里人が借りていたお椀を割らしてしまった。さらに、割ったことを黙っていた。それ以来お椀を借りることができなくなってしまった。（参考資料『飛騨下呂』ほか）

②取材調査

大淵地区にある龍神神社は「椀貸せ淵」の話を再現しており、失った椀を探す五頭の龍の名が刻まれている。大淵地区に住む英語科の今井りえ子先生に聞くと、毎年8月1日に下呂地域で行われる「龍神火祭り」の日には、地区の五頭の龍が祭りの安全と成功を祈願する儀式が行われる。また、祭りが終わった翌日には祭りの無事を感謝する儀式が行われるそうである。



帯雲橋と椀貸せ淵
(7月27日下呂市大淵)



龍神神社取材(7月27日)



龍神神社(7月27日)



龍神火祭り翌日に行われる奉告祭
(2008年8月2日)

③研究・考察

龍神火祭りは椀貸せ淵の話を題材にして、戦後地域住民が作り上げてきた行事である。椀を探すために下呂の五地区に潜む五色の龍が登場し、白鷺橋の上で勇壮な動きを見せる。

| 地区名 | 龍の名（色） |
|-----|--------|
| 小川 | 玉殿龍（赤） |
| 森 | 八幡龍（青） |
| 幸田 | 幸龍（黄） |
| 湯之島 | 若宮龍（白） |
| 少ヶ野 | 大平龍（緑） |

毎年7月上旬から各地区では祭りの準備に入り、龍体の確認、龍の動きの練習を行う。また、祭りには龍が探す椀も神輿となって登場する。椀神輿は厄年の人たちが担ぐことになっている。

祭りのクライマックスは5頭の龍が椀神輿を取り囲み（総がかり）、やがてそれぞれの地区に帰っていくという流れになっている。



龍体の確認
(2008年7月下呂市森地区)



祭りの練習(2008年7月下呂体育館)



椀神輿(2008年8月1日龍神火祭り)



龍神火祭り(2008年8月1日白鷺橋)

(6-3) 孝池水 (こうちすい)

①話の内容

昔、門原の里に左近という身分貧しい人が母を大切にしていました。しかし、母は病気になってしまいました。左近は母に何がほしいかと聞くと、母は「生まれ故郷の琵琶湖の水が飲みたい」と左近に言いました。そこで、左近は琵琶湖まで出かけ、琵琶湖の水を竹筒に入れて持って帰りました。

家にたどり着くと母は、もう亡くなっていました。左近は嘆き悲しみました。その時に竹筒が倒れて流れ出した水から孝池水ができました。(参考資料『飛騨下呂』ほか)

②取材内容

孝池水は孝子ヶ池 (こうしがいけ) ともよばれ、中原地区を走る国道 41 号線の脇にある。公園として整備され、道行くドライバーの休憩ポイントになっている。ここで食堂・売店を営む池田在代子さんから話を聞いた。

「左近を祀る左近神社が近くにあり、孝池水の話語り継いでいる。日照りが続いてもこの池の水は枯れなかったという。現在は小坂の東上田ダムから隧道を通して、公園の横にある瀬戸発電所まで水が運ばれているから以前よりも水量は増えたと思う。」

「左近はこの近くの屏風岩で生涯を終えたが、『私がこの地域に災いが起きないように見守っている』と言い残したそう。だから、屏風岩から落石があっても事故になったことはないと言われている。」



孝子が池公園(7月27日下呂市瀬戸)



売店での聞き取り(7月27日)



門原神明神社(8月11日)



瀬戸発電所(8月19日)

③研究・考察

池田さんから聞いた神社は「門原神明神社」というが、地域の人たちが左近神社とよぶのは、それだけ左近と孝池水に対する思いがあり、池田さんはじめ、地域の人たちが伝承してきたからだろう。このあたりは屏風岩という急峻な崖に囲まれた交通の難所で、江戸時代に切り通し、また、隧道を作った跡が残されている。

この「孝池水」に似た話として、馬瀬と金山に「醒ヶ井の水」という話がある。馬瀬の話は「孝池水」の話とほぼ同じであるが、金山の話では、母親が父親に、琵琶湖の水が醒ヶ井の水になっている。金山町貝洞の日下部紋次さんの家にこの水が湧いており、生活用水に使われている。近江や醒ヶ井と益田との関連は調査しきれていないので今後の課題としたいが、三つの話はいずれも地域に湧くきれいな水にまつわる話となっており、親子の絆の強さを大切にする話として伝えられている。



屏風岩と益田川
(8月10日下呂市瀬戸)



国道脇に残る隧道跡(8月10日)



醒ヶ井の水(8月10日下呂市馬瀬)

